

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## 父なる祖国、母なる言語(3)ハイネとネーション

著者	内田 俊一
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
巻	111
ページ	19-45
発行年	2000-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3925">http://hdl.handle.net/10114/3925</a>

## 父なる祖国、母なる言語（3）

——ハイネとネーション——

## Ⅲ

内 田 俊 一

ハイネは結局、改宗によって、実生活上の恩恵を何ひとつ得ることはなかった。そもそも彼には、うまく立ち回って社会的地位を手に入れようという気も、もはや起らない。改宗ユダヤ人であるところの似非ドイツ人として、つまりユダヤ人でもなければドイツ人でもない者として、自らを意識せざるをえない彼には、もはやドイツ社会への同化を真面目に考える気もない。ハイネが実際にバリーに亡命するのは五年後のことだが、すでにこの時点で、彼は祖国ドイツを去りたいと考える。次に引くモーザー宛の有名な書簡が書かれたのは、一八二六年夏のことだった。

だが、私がドイツという祖国に別れを告げたいと、心から願っていることは全く確かだ。私をここから駆り立てるものは、遍歴の楽しみよりも、むしろ個人的事情（たとえば、洗い落とすことのできないユダヤ人）だ。……それにしても、永遠のユダヤ人の神話は、なんと深い根柢を持っていることか。……その白い鬚の先端を、時は

再び若返らせ黒くしたのだが、いかなる床屋もそれを剃り落とすことはできないのだ。<sup>(48)</sup>

さらにその年の秋にはファルンハーゲンに対して、彼はバリ旅行の計画を打ち明ける。そこでは「図書館<sup>(49)</sup>を利用し、人々や世界を見、著書のための材料を集めたいのです。その著書はヨーロッパ的なものとなることでしょう」と。

これ以後、ドイツでもユダヤでもなく、「ヨーロッパ」が彼の目標となる。後年彼は実際にパリに亡命することになるわけだが、しかし彼が目指した地は、けっしてフランスではなく、ヨーロッパだった。彼にとつてパリは、ヨーロッパの文化と情報の集結点だった。「ヨーロッパには、もはや諸々の国民<sup>ナチオン</sup>は存在せず、ただ諸々の党派があるだけだ<sup>(50)</sup>」という彼の言葉は、彼にとつて「ヨーロッパ」がいかなる意味を持っていたかを、雄弁に物語っている。それはドイツとユダヤの二律背反の克服を可能にする、いわば魔法の言葉だった。「ヨーロッパ」を高く掲げることによって、ナショナルな視点は退けられ、葛藤は、政治的党派の間にそれに還元される。ヨーロッパのリベラルな政治運動の解放理論に同化することによって、彼には、ユダヤ人のための特殊な解放の闘いを志向することが必要になる。ハイネのこの「ヨーロッパ」への心の動きの延長線上に、彼が実際にパリに亡命してから接触することになる、「社会主義」や「共産主義」も位置していると言つてよいだろう。

これは、ひとりハイネのみがたどつた道ではなかった。彼以後も、マルクスを始めとして、数多くのユダヤ人社会主義者ないし共産主義者が、次々とこの道を通つて行くことになる。しかしこれは、やはり一種の逃避ではなかっただろうか。ユダヤ人の陥りやすい、ひとつの罠ではなかっただろうか。ドイツとユダヤの二律背反は、解決されたのではなく、回避されたにすぎない。「国民<sup>ナチオン</sup>」の孕む問題性と内的対決を避けることによって、描き出された理想的社会像には、まさにそうであるがゆえに、再びネーションの悪夢が紛れ込む。それはいわば、ネーションを超越したネーション、超ネーションのごときものとならざるをえない。ネーションの孕む排他性や暴力性は、さらに増幅される。後年のハイネの、共産主義に対する分裂した態度は、よく知られているだろう。たしかに

彼は、彼が憎んでやまないドイツ国粹主義者たちの、不倶戴天の敵である共産主義に對して、一種の宿命論的同意を表明するのだが、他方では、しかもしばしば同一文中で、それに対する恐怖の言葉をも漏らすのである。(最も有名なのは、『ルテツィア』フランス語版の序文(一八五五年)における議論である。)<sup>(1)</sup>あるいはまた、「そもそも今日、富者に対するプロレタリアの憎しみと呼ばれるものは、かつてはユダヤ人憎悪と言われるものだった」という『告白』(一八五四年)中の言葉も、この脈絡の中で読むことができる。ハイネ自身は、自らのこの心の動きを、ロマン主義的な古い世界への愛着から説明するのだが、しかしそれはおそらく、そうではなかった。未来を透視するハイネの目には、回避された問題が、おぞましく形を変えて復活する様子が、すでに見えていたに違いない。問題は、「国民」の成り立ちにあった。それを成り立たせるものとしての言語——母国語——との内的対決こそが、必要だった。

ともあれハイネは、さしあたりドイツにとどまる。『旅の絵』シリーズの成功が、彼をドイツに引きとどめる。観念連合に基づく惑亂的文体が、読者の心を捕えている限り、彼にはここにとどまる理由があった。『旅の絵』第四巻の出版の四ヵ月後、一八三一年五月に、彼がバリーに亡命したきっかけは、おそらく前年のパリ七月革命への感激にあったわけではなく、官憲の手を逃れるということですらなかっただろう。たしかにその年の四月以降、彼に対するプロイセン内務省と警察の追及姿勢は強度を増し、彼の身は危険に脅かされつつあった。しかしそれは、おそらくすでに亡命を決意した彼が、それゆえ検閲を恐れることなく、過激な政治的見解を披瀝した結果であって、その逆ではない。最終的に彼を亡命に踏み切らせたものは、同性愛者の詩人アウグスト・フォン・プラーテン伯爵との論争(と言うよりも、相互攻撃)と、その惹き起こした結果だっただろう。

経緯は次のようなものだった。ハイネは、『旅の絵』第二巻(一八二七年)に収めた『北海』第三部の末尾に、文学上の盟友インマーマンの警句を掲載していた。インマーマンはその中で、ゲーテの『西東詩集』以後ドイツで流行し始めた東方的作風と、その作者たちを揶揄していた。「シラスの果樹園から盗んだ果実を／食べ過ぎた哀れ

な者どもは、口からガゼーレ（アラビアの詩型）を吐き出している<sup>(53)</sup>」と。背景にあったのは、ゲーテ以後のドイツ詩の本流をめぐる、文学流派同士の間の争いであって、標的とされたのはフリードリヒ・リュッケルトとブラーテンだった。だがこのごく穏当な文学的風刺に対して、ブラーテンは、きわめて穏当ならざる反撃に打って出る。彼が一八二八年三月に友人に宛てた書簡には、こうある。「警句が私とリュッケルトに向けられていることは……間違ひありません。インマーマンがそれを書いたことは許せます。しかしハイネがそれを取り上げ、それを支持したということ、彼が第三者の手を通じて、愚かしい言葉を私に言ったということは、許せないだけでなく、ついでに言えば、いかにもユダヤ人のやりそうな手口です。その上『旅の絵』は、聞くところによれば、きわめて人氣のある本だそうです。だから彼は、ドイツ全体を前にして、私の詩に唾を吐きかけたも同然なのです<sup>(54)</sup>。別の書簡によれば、彼にはハイネが、「自分を押し潰すことが可能な、明らかに自分よりも偉大な人物を、どうしてこんなに手ひどく扱うことができるのか<sup>(55)</sup>」、そもそも理解できなかった。ドイツ人である自分が、真正のドイツ語で書いた詩が、なぜ、昨日今日ようやくドイツ語を使うことを許された、ユダヤ人ごときに揶揄されなければならないのか、というのが彼の怒りだった。

ブラーテンの風刺喜劇『ロマン的エディプス』（一八二九年）では、ハイネのユダヤの血筋が徹底して標的となる。「受洗したハイネ」、「小さなベニヤミンの種族のピンタロス」、「アブラハムの嵐<sup>(56)</sup>」、「幕屋祭のペトラルカ」、「シナゴークの誇り」、「彼の口づけは、にんにくの臭いを発する<sup>(56)</sup>」といった調子である。（ついでに言えば、ブラーテンのインマーマンに対する風刺は、きわめて穏当なものだった。）ハイネは、もともと旅行小説として書き始めていた『ルツカの温泉』の構想を変更し、その最後の三章において、ブラーテンへの反撃に打って出る。グンペル改めグンペリーノ侯爵と、その召使いでヒルシュ改めヒアツィントという、二人の改宗ユダヤ人（ドン・キホーテとサンチョ・パンザのパロディでもある）を道具立てとして利用しながら、ハイネは徹底的にブラーテンの同性愛をあげつらう。ブラーテンは、「生あたたかい友情の中で、ただ男に対してのみ燃え上がる<sup>(57)</sup>」詩人として描き出される。しかもハイネは、男性に対するそのブラーテンの欲望が、充足されていることすら疑問視し、彼の男性性

を徹底的に否定する。「他の人々が彼を嘲り笑っているとしても、私は哀れな伯爵に同情している。たしかに彼は詩の中で、憎むべき『因習』への復讐に身を捧げたいと恋いこがれているが、彼が実際にその復讐を遂げたかどうかは、私には疑問だ。私はむしろ、彼自身が感動的に歌っているように、侮辱に傷つき、拒絶され、蔑まれ、ないがしろにされてきたのではないかと思う。」プラーテンの詩は、「苦勞して練り上げられたその形式に関して……尻の肉であり、……内容に関しても尻の肉」である。

もちろんこれは、見ていてあまり愉快な論争ではない。傷を持つ者同士が、互いの傷を掻きむしり合っている。

これは文学論争などというものではなく、互いに相手を社会から排除しようとする、いわば存在を賭けた戦争である。互いに自分が正常であると主張し、相手を異常として指弾することによって、「正常」な社会から締め出そうとする。そこには、一種の近親憎悪のような感情が働いている。ドイツ社会から排除されるユダヤ人としてのハイネが、自らの性的正常性を言い立てることによって、性的異常者としてのプラーテンを社会から排除しようとしたことは、もちろん彼の名譽になることではない。彼の常軌を逸した攻撃は、たしかに文学論争の許容範囲を越えており、彼は世論から激しい反発を受けることになった。だが彼は、そもそも詩人としての出発点から、自らの詩の何らかの特徴が、ユダヤの血統に結び付けられはすまいかということに、極度の警戒心を抱いていた。それが、ドイツの詩人としての彼の存在そのものの否定に、つながるものだったからである。そうだとすれば、プラーテンの攻撃が、彼を逆上させたのは無理もなかった。そもそも相手の存在そのものを全否定する形で、最初に攻撃を仕掛けたのはプラーテンだった。彼は嘲笑的な調子で言っている。自分にとって、ハイネがユダヤ人であることは、「道徳的欠陥ではないが、しかし滑稽な要素」<sup>(6)</sup>なのだ。ユダヤ人がドイツ語で詩を書くこと、そしてドイツ人が真正のドイツ語で書いた詩に対して、ユダヤ人が口を挟むことは、彼にとって滑稽以外の何ものでもなかった。ハイネにとってこれは、ドイツの詩人としての自らの存在が、全否定されることを意味した。もちろんハイネは、逆上のあまり、相手と全く同じ次元で反撃を行なった（プラーテンがハイネの割礼を受けたペニスを嘲弄するのに対して、ハイネは相手の肛門をあげつらう）のであって、その振舞いは見苦しい。だがその攻撃が、このような切羽

つまった地点から発したことは、理解されなければならないだろう。

だが、それにしてもなぜハイネは、プラーテンの詩を愛読するグンベル改めグンペリーノ侯爵と、その召使いのヒルシュ改めヒアツィントという、二人の改宗ユダヤ人の形姿を借りて、プラーテンへの風刺を行なったのだろうか。最初に存在した、そのような道具立てに、あとからプラーテンへの風刺が盛り込まれたということにすぎないのだろうか。おそらくここで、ハイネの作家としての真実性が、作者自身の意図を裏切っているのである。彼の作家としての真実性は、攻撃する者と攻撃される者との間の親近性を、意図せぬままに浮かび上がらせてしまった。

ヒルシュヒアツィントは、Hの頭文字を変えない改名の長所について述べる。ちょうどハリーがハインリヒと改名するように。あくどいまでの攻撃にもかかわらず、おそらくハイネの意識の深層には、自分と同じように「正常」な社会から排除される立場の相手への、理解が存在していた。性的に異常とされる者と、「国民」として異常とされる者の、共通性への理解が。さらにそればかりでなく、男性としてのドイツ社会に、女性的に身を任せる同化ユダヤ人としての、自分自身の性的倒錯性が、相手の性的倒錯性と通じるものを持っているという理解も。自らの男性性の過剰な誇示は、むしろそのようなコンプレクスから発していた。次の一節には、弱者としてのプラーテンへの、共感のまなざしさを感じ取ることができる。「あるいはプラーテン伯爵も、今とは違う時代に生まれ、さらに今の彼とは別人であつたならば、詩人であつたかもしれないのだが。伯爵の詩に自然の響きが欠けているのも、ひよつとすると、自分の真の感情を名指すことが許されず、自分の愛に常に敵対する因習が、そのことについての嘆きさえ、あからさまに口にすることを禁じ、……いかなる感情をも、びくびくと偽装しなければならない、そんな時代に、彼が生きているためなのかもしれない。」<sup>(4)</sup>

ハイネはインマーマンに宛てて、自分たちに対する愚劣な攻撃によって、プラーテンは「くそ坊主どもと男爵どもと男色家どもの同盟に、自分を売り込んでゐる」のであって、「男色家どもは、教皇權至上主義者と貴族の大いなる同盟の、奉仕者にして構成員なのだ」と書いているが、彼がどこまでそれを本気で信じていたのかは、分からない。むしろ逆上のあまりの罵詈雑言として理解すべきだろう。ともあれハイネは、プラーテンの彼に対する攻撃

の中に、また自らの反撃への世論の無理解の中に、ドイツの詩人としての彼の存在を否定し、抹殺しようとする巨大な意志を、聴き取った。プラートンの言葉は、ただ彼ひとりから発せられたのではなく、その背後に存在する、強固なパラダイムから発していた。ドイツを去り、パリにおもむくことへと彼の心を動かしたのは、おそらくそのような体験だった。

ハイネの生涯に大きな痕跡を刻んだ、もうひとつの重要な出来事は、『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』（一八四〇年）の執筆と、それに対する世論の反応だった。プラートン事件の時と同様に、ここでも近親憎悪の感情の働きが認められ、また彼の作家としての信望は、同じように地に堕ちた。ハイネより十一歳年長の改宗ユダヤ人ベルネは、進歩的傾向の政治・文芸評論家として、ハイネの先行者にあたり、若きハイネにとっては目標となる存在だった。亡命前のハイネは、フランクフルトの町にベルネを訪ね、その町を、彼が生まれ育ったゲットーまで含めて、隅々まで案内してもらったこともあった。一八三一年五月、パリに亡命したハイネは、すでにその一年前に同じように亡命していたベルネと再会し、旧交を温めることになる。しかしその関係は、すぐに反目に変わっていった。

ベルネは彼に、共同で雑誌を発行しようともちかける。フランスで印刷されるその雑誌は、検閲に晒されることなく、自由にものが書けるはずだった。しかしハイネはその申し出を断わり、当時のドイツの最大の出版業者コッタが発行する、『アウクスブルク一般新聞』の通信員として、それに寄稿することを決断する。二人の対立は、すでにこの頃から兆していた。「アウクスブルク一般新聞」は、政治に無関心で節操のない新聞として、共和主義者や急進的民主主義者たちからは、「アウクスブルクの淫売」<sup>(3)</sup>と呼ばれていた。しかしハイネにとって問題は、自分の書いたものが多くの読者の目に触れ、影響力を及ぼすことができるということだった。地下出版物のようにして、こっそりドイツに運び込まれる雑誌に、そのような影響力を求めることはできない。当時のドイツ最大の出版部数を誇る新聞に、執筆の場所を求めることは、彼にとつて当然の結論だった。あるいはここに、モーゼス・メンデルスゾーンにも見られた通俗性への意志<sup>(4)</sup>と、同種の志向を認めることができるかもしれない。



パリにおけるその後の二人の活動も、(もちろん同じようにドイツから亡命した改宗ユダヤ人として、共通するものはあるのだが) ある意味で対照的な側面をのぞかせる。ベルネにとつて重要なのは、なんといつてもドイツの読者であつて、彼がパリにおいて活動する意味も、できる限り検閲を免れた状況で、自らの政治的意見を(ドイツの亡命者たちの新聞に)発表するということにあつた。しかしハイネにとつてパリは、国家の枠を越えた、ヨーロッパの情報の中心地として意味を持っていた。それどころか彼は、フランスの文学市場を、自らのために開拓しようとして試みる。それは、彼がフランスの作家になろうとしたということの意味するのではなく、またおそらく、単にドイツとフランスの間の掛け橋になろうとしたということだけでもない。彼は、ドイツの作家として、フランスで読まれることを望む。フランス語訳のほうに先に出版された『ロマン派』(一八三三年)や『ドイツについて』(一八三五年)(ドイツ語版は『ドイツ宗教・哲学史考』)は、そのような試みと見なすことができる。この試みは、経済的にはけつして十分な成功を収めたとは言えないにしても、いかにもハイネらしい、惑亂的な手法と言うことができるだろう。

ベルネは、間違いなく本物のドイツの愛国者だつた。彼はユダヤ人としての自分と、ドイツの愛国者としての立場を、生真面目に一致させようと努める。彼は、自らをドイツ人として意識する場合でも、ユダヤ人として意識する場合でも、国民国家的発想から一步も抜け出すことはない。しかしハイネは、もはやドイツ人でもなければ、ユダヤ人でもなかった。彼は国民国家的枠組を弄び、あわよくばそれを破碎しようとする。ベルネにとつての亡命は、物理的・外的なものにすぎず、精神的には、彼はあくまでもドイツにとどまっていた。しかしハイネにとつて亡命は、精神の亡命だつた。

君たちは、肉体の亡命ならば、何とか想像がつくだろう。しかし精神の亡命を思い浮かべられる者は、一日中フランス語を話し、また書き、それどころか夜中には、恋人の胸の中でフランス語のため息をつくことを余儀なくされる、ドイツの詩人を描いてはかない、私の思考もまた亡命している。外国語に亡命しているのだ。<sup>(15)</sup>

ベルネにとってドイツとの対立は、あくまでもその反動的政府との対立、つまり外的対立にすぎず、精神的には彼はドイツを愛し、生涯愛国者であり続けた。しかしハイネのドイツとの対立は、むしろ内的対立であり、亡命はただ、それが外面的に形をとったものにすぎなかった。

ハイネの『ドイツについて』がフランスで出版された時、当時のフランスにおけるドイツ哲学研究の大御所、ヴィクトル・クーザンの息のかかった評者は、次のような驚くべき評価を下した。フランス人の猿まねをするばかりで、根本的に非ドイツ的なハイネには、ドイツ哲学のような、重要で本質的な事柄を論ずるために必要な、真剣さが欠けているのだと。<sup>(66)</sup> またハイネのドイツ語版全集が、カンペによって出版されたのは、没後六年を経た一八六二年のことだったが、フランス語版の全集の刊行が開始されたのは、それに先立つこと七年、まだ彼が存命中の一八五五年のことだった。<sup>(67)</sup> これらのことから、ハイネという存在の特異性が浮き彫りになっている。

かつては志を同じくした二人の仲は、次第に險惡なものになっていく。政治的に急進化し、パリ在住のドイツの共和主義者たちとの結び付きを、ますます強めていくベルネに対して、ハイネは同意できず、彼に会うことを避けるようになる。たまに会えば、ハイネは無節操で軽薄な俗物を装い、生真面目なベルネを苛立ててからかう。ベルネは間もなくハイネのことを、貴族階級に買収された、自己中心的で恥知らずな臆病者と見なし、口をきわめて非難するようになる。すでに一八三一年秋からベルネは、最初は個人的に、のちには公的な場で、ハイネがドイツの反動的政府から金銭を受け取っている密偵なのだ、という噂を流す。たしかにハイネは、金銭に関して清廉潔白とは言えず、たとえばティエール内閣からギゾー内閣の時代にかけて、フランス政府からかなり高額の年金を受け取っており、そのことで様々な方面から非難を受けた。ハイネという人物には、国民国家的枠組みなどは無視して、受け取れるものなら、何でも受け取っておこうというところがあった。それが、禁欲的な愛国者ベルネの目にどう映ったかは、想像するに難くない。ベルネから見ればハイネは、花から花へと、ひらひら飛んで行く蝶のように無節操だった。ベルネの誤解を招くような、一種の不真面目さがハイネにあったことは間違いないのだが、しかし彼には、ベルネとは全く違った形であるにしても、政治的にきわめて真剣な部分があるのであって、反動的

政府のスパイを働くなどということは、ありえない話だった。

ハイネはこうした告発に対して、ベルネの存命中は沈黙を守り続ける。ベルネが亡くなって（一八三七年二月）から初めて、彼は公式な反論を試みなければならないと考えるに至る。死後、ベルネが「聖人の列に加えられ」、彼の見解が正典化しかねないという事情も、そこには働いていた。そのようにして書かれたのが『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』（一八四〇年）だが、それは単にベルネに対する政治的・反論にとどまらない、精神的・哲学的な内容をも持つことになった。同化し改宗したユダヤ人として、社会的原点を同じくし、またその後の政治的経歴においても、似たような道をたどってきたベルネとの対決は、自分自身の私的な、また政治的な、さらには文学的なアイデンティティを問う直すことにつながった。作家としての自らの営為は、いかなる関係において社会と結び合っているのか、またそもそも文学は、いかなる形で政治活動と関わるのか、ベルネとの対比の中で問題化されるに至った。政治的・文学的な自己規定を目指すものとして、この作品は、ハイネの全作品中に中心的な位置を占めるものとなる。

ハイネはベルネとの対立を、ナザレびとーギリシアびとという、有名な対概念を持ち出すことによって説明しようとする。これは、特定の民族と結びついたものではなく、むしろ精神の方向、世界観を指している。ハイネによれば、全ての人間が、この二つの類型のいずれかに分類できるのである。ユダヤびととキリストびとを統合した概念であるナザレびとは、「禁欲的で、偶像破壊的な、また病的に精神化を求める衝動」に支配され、他方ギリシアびとは、「生を明るく楽しみ、発展に誇りを感じ、現実主義的な本性」<sup>(9)</sup>を持つている。ハイネは、ベルネを代表とするドイツの共和主義者たちをナザレ的と呼び、自らを、ゲーテのあとを継ぐものとして、ギリシアびとの側に置くことによって、対比を際立たせる。かつてのハイネは、ユダヤ的なものへの自らの肩入れを、キリスト教精神の「解毒剤」<sup>(10)</sup>としてのその意味から説明し、両者を明確に対比して考えていた。しかし今や彼は、キリスト教精神とユダヤ教精神を、同根のものとしてひとつに括り、人類の真の解放を目指す限り、両者ともに止揚されねばな

らぬものとして位置づける。ある意味でこれは、彼の初期恋愛詩において、同化ユダヤ人としての自らの女性的体験を、無理やり男性的鑄型に押し込んだのにも比すべき、力づくの転倒であつて、このことによつて彼には、国粹的な反ユダヤ主義者として、自らの不倶戴天の敵である文学史家メンツェルを、(ゲーテの対立者として)「ユダヤびと」と呼ぶことが可能になるのである。だがもちろん、この対概念の機能をそのことだけに限定するのは、正当とは言えないだろう。むしろそこに読み取られるべきものは、「ユダヤ的」なる概念を、宗教的次元からも、民族的次元からも解き放ち、精神的次元に持ち込むことによつて、支配的意味体系のパラダイムを惑乱しようとする意志である。

ベルネはハイネを批判するにあたつて、才能—性格、ないし詩人—性格という対概念を持ち出した。ハイネには、たしかに詩人としての才能があるが、しかし彼は性格を欠いており(無節操であり)、そうであるがゆえに(ベルネと違つて)真剣な政治的行為に関わることができないのだと。ベルネによるこの対比は、その後もハイネを批判するに際して、様々な論者によつて持ち出され、現代に至るまで、ハイネ批判の通奏低音をなしている。ハイネはこれに対して、いわば正負の符号の転倒を試みる。性格を有する人間とは、「ある特定の人生観が支配する一定の領域内に生き、活動し、いわばこの人生観と一体化しており、自らの思考や感情とけつて矛盾することがない、そんな人間」のことである。それに対して、自らが生きる時代を越えてしまふ精神の持ち主は、大衆の目の届かぬ領域内で動いているがゆえに、そこに性格の有無を判別するのが困難なのである。視野の狭い大衆に容易に理解され、明確に性格として称えられることは、むしろ視野の狭さのしるしである。ベルネのように、作家における性格が問題になる場合は、「そもそもその行為が、言葉から成り立っているだけに、そのような称賛は一層問題を孕んでいる」のであつて、そこに認められるのは、結局「芸術の欠如」にはかならないのだ。

時代のパラダイムにとつぷり潰かり込んでいる人間は、そのパラダイムの惑乱と破壊を目指す人間を理解することができない。そして特にそれが言葉に拠つて立つ人間同士の場合、パラダイムに支配される人間の目には、相手の言葉の本当の破壊力が見えないのである。ハイネは、貴族たちからは「暇な理想にかかずらう夢見がちの廷臣」

と見なされ、ベルネを始めとする急進主義者たちからは、「全くの無」<sup>(74)</sup>としか見なされない「詩人」に対して、むしろ現実の政治に関わる者などよりも、重要な権限を付与しようと試みる。古代象形文字で書かれた「太古の声」の謎を解き、「人類が自らの病を癒すために飲まねばならぬ、隠された泉が流れ出す場所」<sup>(75)</sup>を探し当てることこそ、詩人の職能である。そしてそうであるがゆえに、一見世間離れして見える詩人の言葉は、政治的文筆家の理路整然とした多弁などよりも、はるかに現実近く、また信頼の置けるものである。詩人は、言葉というものが持つ、本当の威力を知っている。詩人ダンテが『地獄篇』の登場人物を描いた時、それらの人物は

単に彼の精神から湧き出たのではなかった。彼がそれらの人物を詩作したのではなかった。彼はそれらの人物を生き、また感じ、目で見、また手で触ったのである。彼は本当に地獄に行った、呪われた者どもの町へ行ったのだ。……ダンテは亡命していたのだ——<sup>(76)</sup>

単なる肉体の亡命しか知らず、精神的にはドイツ語という母語の世界に安住している者は、その意味体系の枠内で、言語を単なる道具と見なしつつ、無自覚に動くことしかできない。そのことによって現実はいささかなりとも変化することはないだろう。しかしダンテと同様に、精神の亡命を果たしたハイネ、つまり国民国家と結び付いた母語の、恐るべき威力を認識したハイネには、その言語の意味体系を惑乱し、破砕せんとする戦略によって、現実を変革することが可能になる。これこそが、ベルネに対するハイネの回答だった。すなわち二人の同化ユダヤ人同士のこの対決の中で、ユダヤ人アイデンティティとドイツ人アイデンティティを一致させようと努め、それゆえあくまでも国民国家的発想にとどまり続けるベルネに向けて、むしろアイデンティティそのものを惑乱し、それを成り立たせる基盤を破壊しようとするハイネが、突きつけた回答だった。

ハイネにとって『ルートヴィヒ・ベルネ回想録』は、最も激しい批判を呼び、作家としての名声を最も下落させる作品となった。擁護する者は、ファルンハーゲンやマルクスら、ごく少数にすぎず、ハイネのこれまでの著作の

売れ行きさえ、びたりと止まってしまふ。ハイネは、経済的にも行き詰まり、その困窮からの脱出は、四年後の『新詩集』と『ドイツ 冬物語』を待つしかなかった。悪評の原因の一端が、すでに死去して反論もかなわぬベルネの、いわば屍に鞭打つハイネの攻撃、特にベルネ本人と彼の女友達ヴォール夫人、さらにその夫ザーロモン・シュトラウスとの間の、奇妙な三角関係の暴露にあったことは間違いない。これは、ハイネの性的放縱を咎めたベルネへの、いわば面当てであつて、プラターテンの同性愛の暴露と同次元の攻撃であり、結局シュトラウスとの間の決闘に帰着することになった。しかし悪評の原因は、けつしてそればかりではなかつただろう。むしろ、根本的には国民国家的発想によつて規定された、愛国的反対派知識人ベルネへの攻撃が、これまでハイネの読者であつた同種の人々を、離反させることになつたのが大きかつたと思われる。彼の出版者カンペは、ベルネ論出版の直後に、それへの世間の激しい反発を目のあたりにして、ハイネに宛てて書いてゐる。「あなたは、ドイツの性格の痛い傷口に、塩と胡椒を擦り込んだのです。それは激しく痛んで悲鳴をあげており、致命的な影響を残すことになるでしょう。あなたと、そしてドイツの作家としてのあなたの未来に對して。」

ハイネは孤独な人間だつた。それはけつして、彼の個人的な性格に基づくものではなかつた。むしろそれは、彼がユダヤ人でもなく、ドイツ人でもないことを望んだからだつただろう。ベルネ論の招いた四面楚歌の中で、すでに萌した肉体の不調は、年を追うごとにますます悪化し、一八四八年以降五六六年の死に至るまで、彼はほとんど身動きひとつできぬ、いわゆる「しとねの墓穴」の生活を続けることになる。「声以外にほとんど何も残っていない」「唯心論的骸骨」となつた彼は、「安らぎなき墓、死者の特権なき死」<sup>(29)</sup>の中で、これまでの自らの営為——政治的な文学的な——を、詩の形で総括しようとして試みた。「見捨てられた哨兵」と題されたその詩は、最後の詩集『ロマンツェーロ』（一八五二年）の第二部「哀歌」の中に、そしてその末尾に置かれた「ラザロ」詩群を締め括るものとして、収められた。

見捨てられた哨兵

解放戦争の見捨てられた哨所を

私は三十年間忠実に持ちこたえた

勝つ見込みもなく 私は戦った

無事に家に帰れぬことは分かっていた

私は昼も夜も見張り 眠ることはできなかった

幕舎の中の友たちの一群のようには

(それにあの勇士たちの大きないびきが

うとうとした私を目覚めさせたのだ)

そんな夜 私はしばしば退屈に襲われた

さらに恐怖にも (何も恐れぬのは愚か者だけだ)

それらを追い払うため 私は口ずさんだ

一篇の風刺詩の傲岸な韻律を

そうだ 私は歩哨に立ったのだ 銃を手に

そして誰か怪しげな奴が近づいたなら

見事な射撃で奴のあさましい腹に

熱い たぎるように熱い弾丸を撃ち込んだ

もちろん時には そんな悪漢にも  
私と同様 射撃のうまい奴はいた  
ああ 私には否定することができない  
傷口は開き 私の血は流れている

哨所は空白だ 傷口は開く

倒れた者のあとは 他の者が埋める

だが私は倒れても敗れず 私の武器も  
砕けてはいない 私の心は砕けたけれど<sup>(8)</sup>

「解放戦争」という言葉は、当時のドイツ人にとっては、一八二二―一五年の対ナポレオン戦争を指し、従ってむしろ反革命的色彩を帯びた言葉だった。しかしもちろんここでハイネは、そのような意味でこの言葉を使っているわけではない。彼の言う「解放戦争」は、人類の民主主義的解放を目指すものとして、むしろ進歩的なフランス人と同盟を結んだ、革命的行為を意味していた。時代の中心概念を転倒し、それに正反対の意味を付与するのは、ハイネのよく使う戦術だった。ハイネはすでに若い頃から、自分を人類の解放戦争の一兵士と規定してきた。ここで彼は、その戦士としての生涯を総決算しようとしている。

しかし、戦争の比喩を借りた、勇猛な見かけに欺かれてはなるまい。ここで際立っているのは、むしろこの戦士の孤独さである。題名からしてすでに、不思議な多義性の中に揺れている。「見捨てられた哨兵」と訳した、フランス語の題名 *Enfant perdu* は、もちろん「決死隊の兵士」の意味を保持しながらも、ここではむしろその字義通りの意味、つまり「道に迷った子供」の含意をただよわせている。そのような者として、彼には「無事に家に帰れぬことは分かっていた」のである。さらにこの戦士は、敵と対峙しているばかりではない。彼は、味方であるはず



の「友たちの一群」からも奇妙に孤立し、眠りこける彼らから離れて、ただひとり目覚めて見張りを続けるのである。彼を眠らせぬものは、敵の攻撃であるよりも、むしろその友たちの「大きないびき」である。たとえばベルネのそのような。この兵士の戦いは、敵・味方関係によつて規定された、国民国家的戦争概念には、いささかそぐわない。彼の任務は、誰からも見捨てられた哨所で、ひたすら見張りを続けることである。その退屈と恐怖から、彼は傲岸な風刺詩を口ずさむのだが、それがつまりは、見張りを続けることの意味なのだろうか。

もちろん戦争である以上、そこには敵も登場する。しかしこの敵も、いささか不思議な敵である。「私」が、その「あさましい腹」に「熱い たぎるように熱い弾丸を撃ち込む」、この敵についての描写は、奇妙に同性愛的雰囲気彩られている。「熱い」と訳した形容詞 *warm* は、しばしば同性愛を暗示する言葉として使用される。ハイネがこの一節を書いた時、彼の念頭にあったのは、おそらくプラーテン伯爵だっただろう。しかしプラーテンは、政治的に見れば、けつしてハイネが主張したような反動派の頭目などではなく、当時の文脈では、むしろ一定の進歩性を認めるべき人物だった。だがそうであるにもかかわらず、プラーテンこそハイネの敵であり、彼の傷口を開き、彼に血を流させた人物だったのだ。言葉という弾丸を用いた戦争において、まさにその言葉を使用する権利と資格を、ハイネに対して全面的に否定したのは、ほかならぬプラーテンだったのだから。そしてその攻撃が、長年にわたつて彼の血を奪い、ついには彼の致命傷となったことは、彼にも「否定できない」のである。

言葉を戦場とするこの戦争において、彼がひたすら歩哨として見張り続けたもの、それはドイツ語という母語の現状にほかならなかつただろう。だが「三十年間忠実に持ちこたえ」てきたその「哨所」を、彼は離れざるをえない。死の時間が近づいているのである。その空白を埋め、彼と同じように見張りを続ける者が、誰かいるのだろうか。通常の戦争ならば、「倒れた者のあとには 他の者が埋める」だろう。しかしこの奇妙な戦争の中で、誰からも「見捨てられた哨所」を、彼に代わつて引き継ぐ者は、本当に存在するのだろうか。最終連の言葉には揺れがある。哨所を引き継ぐ者の存在は、むしろ彼の希望にすぎまい。哨所を空白に残したまま、彼は死んでいく。しかし彼は敗れたわけではない。彼の「武器」である言葉は、けつして碎け散つたわけではない。それは、その有効性に異議

を挟む者の存在にもかかわらず、永遠に残り、武器として使用され続けるだろう。彼自身の心は、砕け散ってしまっただけだ。

最後に、ハイネという人物の孤独について、そしてその孤独なハイネにとつての愛の意味について、静かに、だが正確に歌った、次の詩を引用して締め括りたい。「追悼祭」と題されたこの詩も、同じく『ロマンツェーロ』に収められた。ここでは、ハイネはすでにこの世になく、その命日に自らの墓を訪ねる妻のマティルデを、空高くから優しく見守っている。ここに歌われる愛——孤独なハイネが最後に行き着いた愛——は、あらゆる「国民」概念を剥ぎ取られた、裸の人間同士の愛である。

### 追悼祭

キリスト教のミサも歌われず  
ユダヤ教の祈りもとなえられず  
何も言われず 何も歌われまい  
私の命日には

だがそんな日には  
もし晴れて穏やかならば  
モンマルトルを散歩するかもしれぬ  
パウリーネを連れだした妻のマティルデが

永久花の花輪を持ち

私の墓に供えるために

そしてため息をつく 「可哀ホイツェ・オンムそうな人」と

悲しみに目をうるませて

だが私の住む場所は空高く

可愛い妻に椅子を

勧めることさえかなわない

疲れた足でよろめいているのに

可愛い 太った お前

歩いて家に帰ってはいけない

柵の格子の向こうに

辻馬車が待っているじゃないか(22)

#### IV

マルセル・ライヒ＝ラニツキーは、ナチス体制下に過した少年時代の思い出として、ハイネの「ローレライ」について触れた、ある書物に言及している。著者によれば、この詩の言葉は、ドイツ語ではなくイディッシュ語である。それは有名な冒頭の一行からすでに明らかであって、ドイツ人であれば、Ich weiß nicht, was soll es bedeuten などといった語順の誤りは犯さず、Ich weiß nicht, was es bedeuten soll と書くはずである。このイ

ドイツシュ語のハイネの詩を口にした者は、いったいどうなるだろうか。「すぐに言葉が腕にとりつき、肩をすくめることを強いられる。一方手のひらは両側に開いていく。典型的なユダヤ人の身振りである。」<sup>(83)</sup>もちろんこれは、真面目に問題にすべき議論ではない。だがここに見られる排除への意志は、真面目に問題にされなければならぬ。排除への意志の後に、初めて「ユダヤ人」の規定が成立するのだから。

ドイツにおけるハイネ受容（と言うより、むしろ不受容）の歴史を論じたポール・ピーターズは、こう述べている。「ドイツにおけるハイネの拒絶の歴史においては、けつして『異質なものの』の排除が問題になるのではない。この拒絶の歴史は、むしろ自らに固有のもの、ものの排除の歴史であり、この『固有のもの』、つまりドイツの政治や歴史、言語や感情に深く由来するものが、『異質なものの』であるとの宣言の強行である。」<sup>(84)</sup>そしてこの宣言は、先の引用にも見られたように、まさにハイネの言葉をめぐって、強行されるのである。それはナチスの時代に始まったことではなく、すでにハイネの存命中から、それも彼が詩人として出発した最初期から、常に彼につきまといつていた。自らの詩作品のある種の特徴が、ユダヤの出自と結び付けられはすまいかという不安は、最初から彼を脅かした強迫観念だった。それは、百年もの歳月を隔てたカフカが、（自分ばかりでなく）ドイツ語で書くユダヤ人作家すべての作品を、文法上の誤りなど何ひとつない完璧なドイツ語で書かれた作品を、それにもかかわらず「イディッシュ」にすぎないと貶めるのにも似た、強迫観念である。だがもちろんこれは、単なる思い込みの想念などではなく、彼らにそう思わせる力の存在を、背景として持っている。その力は、すでにハイネが生まれる以前から働いていた。ハイネはただ、その力によって選出され、「ユダヤ人」を代表する位置に押し上げられた（あるいは、押し下げられた）だけなのだろう。おそらく、ドイツ文学史における、受容されざるユダヤ詩人ハイネの地位は、ドイツ国民国家形成のプログラムの中に、最初から予定として組み込まれていた。

未だ現実形態として国民国家を持たないドイツにとって、ドイツ語という「母国語」は、ナショナル・アイデンティティを保証するものとして、重要な意味を帯びざるをえなかった。一般に母国語は、国民国家を形成する最も重要なファクターだと言えるだろうが、ナショナル・アイデンティティが未だ不安定なドイツにおいては、そこに

全比重がかかり、そのことが、たとえばフィヒテの『ドイツ国民に告ぐ』に見られるような、母国語の神聖視へと、さらには母国語からの「ユダヤ語」の排除へとつながっていった。若きハイネが、おそらくフィヒテの影響を受けつつ、ドイツ語という母国語に、最後の立脚点を求めたのは象徴的である。それこそが、そしておそらくそれのみが、ドイツ人としてのアイデンティティの保証を——ユダヤ人である彼にも——与えてくれるものだったのだから。しかし彼がどれほど完璧なドイツ語を書こうとも、やはり彼は「ユダヤ語」の書き手として排除されるしかなかった。いったいなぜなのだろうか。ナショナル・アイデンティティを固体化するためには、どうしても触媒としての内部の異質物を必要とするからだろうか。それが国民国家形成の原理なのだろうか。もし異質物が最初から存在しないのだとすれば、なんとしてもそれが作り出されなければならない。

ハイネの母はイディッシュ語を喋っていたと言われている。ハイネは自らの母語として、実の母の言語を捨て、同化のために、ドイツの母国語を選び取ったのだろうか。そのような問いは、おそらくその問題設定からしてすでに、誤っているのである。そもそもユダヤ人の母語たるイディッシュ語という言語が、どこかに実在したのだろうか。もしそれが実在したとすれば、その誕生の時は、ドイツ語のそれと同時だった。ドイツ語がドイツ人の母語として措定された時、それと全く同時に、イディッシュ語がユダヤ人の母語として措定されねばならなかった。そのようにして初めて、イディッシュ語なる言語が存在することになった。そもそも「母(国)語」というものではなく、一個の政治的多様体における一個の支配的言語による権力奪取があるだけ」なのである。政治的多様体の中から、一個の言語体系が、あたかも実在であるかのごとく浮かび上がった時、その多様体が孕んでいた様々な可能性の中で、それと対極をなすべきものと想定された一個の被支配的言語が、こちらもまた、あたかも実在であるかのごとく、浮かび上がってきたのだった。ドイツ語とイディッシュ語の関係は、ドイツ人とユダヤ人の関係に対して、パラレルの位置にある。ドイツ人がネーションとして意識され始めた時、ドイツ語が生まれ、そのネーションから排除されるべき対象として、ユダヤ人が意識され始めた時、イディッシュ語が生まれた。それ以前には、どちらの言語もけっして存在してはいなかった。存在していたのは、ただ多様な意味体系の多様な絡み合いだけだった。

ドイツ語がドイツ語として意識され始めた時、つまりドイツの国民国家への胎動が始まったその当初は、イディッシュ語は独立した言語とは見なされず、ドイツ語のユダヤ的方言と見なされた。イディッシュ語についての初期の辞書は、ユダヤ人の手になるものも含めて、全て「ユダヤ・ドイツ語」という名称を使っている。<sup>(87)</sup> 中高ドイツ語の基本構成の中に、ヘブライ・アラム語の要素と、スラヴ系言語の要素を取り込んだものとして、そのような扱いは、あるいは当然だったかもしれない。だが十七／十八世紀の、主に神字によって方向づけられたイディッシュ語研究が、いったん退潮に向かうと、それに代わって登場した新時代のドイツ語研究者たちは、ドイツ語方言研究の研究対象として、長らくイディッシュ語を無視し続けた。その文献のほとんど全てが、ヘブライ文字で綴られているという事情からだけでは、このことの説明はつかないだろう。十九世紀には、ヘブライ語の知識は、ドイツ語研究者にとっても必須のものと考えられていた。<sup>(88)</sup> おそらくその間に、イディッシュ語に対する捉え方に変化が生じていたのだ。(それはまた、「ユダヤ人」に対する捉え方の変化とも軌を一にしていた。) ドイツ語研究者たちは、ドイツ国民国家の理念を担うイデオログとして、イディッシュ語をドイツ語の一方言と認めることをためらったのだらう。と言つて、それを独立した言語と認めることも、また不可能だった。それは独立しているようで、していない、真正ならざるドイツ語、いわば二級のドイツ語と見なされることになった。そのようなものとして、それは、あつてはならない存在であり、そうである以上、研究の対象とはなりえないものだった。そして研究の対象にならなくても、否むしろそうであるがゆえに、ユダヤ人の母語「イディッシュ」という幻影は、一般のドイツ人の心の中に確固たる場所を占めることになった。

「ユダヤ人の言語」を具体化してしまうこの詐術を、誰よりもよく認識していたのは、当のハイネだったかもしれない。というのも彼は、ベルネ論の中で、こんなことを書いているからである。彼はベルネに伴なわれてフランクフルトの町を散策し、株式取引所の近くで商人たちが話し合っているのを耳にする。そこで彼は注釈を入れる。「私たちが北ドイツで『ユダヤなまりで話す (Mauscheln)』と呼ぶもの、それはフランクフルトの地特有のお国言葉以外の何ものでもなく、ここでは割礼を受けない住民も、割礼を受けた住民と同じくらい見事に、それを喋っ

ている。ベルネは、この隠語を話すのが大変下手だった……」イディッシュユダヤ語などという実体は、どこにも存在しない。しかしどこにも存在しないからこそ、かえってそれは亡霊のような存在感とともに、人々の心に深く根づくのである。「ちびのユダヤ人で長い髪のおじいさん」をめぐる、ハイネの幼年時代の体験については先に述べた。その時級友たちは、今初めてユダヤ人として意識したハイネに向かって、「動物の声を物まねしながら」はやし立てたのである。なぜか。ユダヤ人の言語イディッシュは、とうてい人間の声とは思えない、動物の発音によって口にされるからである。少年ハイネがそのような言葉を口にしたのではない。そうではなく、彼がユダヤ人であることが判明した瞬間から、彼の言葉は、そのようなものでなければならなかったのである。ユダヤ人の言葉がそのようなものであることは、誰でも皆知っていた。

この体験はやはり、ハイネの人生にとって決定的だった。それが、「母国語」を固定化する機関、つまり「言語共同体としてのエスニシティを創出する主要な制度」としての学校教育の場で起きたという点で。さらに事件が、最終的に言語の問題へと——その後の彼の立脚点となる母国語の問題へと——収斂していったという点で。これ以後彼は、自分の書く言葉がドイツ語ではなく、イディッシュ語にすぎないと指摘されることを、常に恐れなければならなかった。しかし「イディッシュ語」には、そもそも実体がない。もし実体があるならば、そこから逃げることも可能だろう。しかし実体のないものから、ひとは逃げることはできない。その氣にさえなれば、たとえば先に引いたナチスの御用評論家のように、いつでも、またどこにでも、イディッシュ語の痕跡を発見することは可能なのである。たとえハイネが、文法上の誤りなど指摘しようもない、正確無比なドイツ語を書いたとしても、彼は常にイディッシュの痕跡を云々されるように、あらかじめ運命づけられていた。イディッシュの混入によって、ドイツ語を冒瀆する者としての役割を、あらかじめ割り振られていた。

ピーターズによれば、かのカール・クラウスのハイネ論に至るまで、いやそれどころか戦後のアドルノのハイネ論に至るまで尾を引いている、ドイツ語を墮落させた者としてのハイネというイメージは、実は当のハイネ個人をはるかに越えて、そもそもヨーロッパにおけるユダヤ人なるものの根源的イメージにまで溯るのである。キリスト

教教義の中心をなす救済神話、つまり救世主の到来を、ユダヤ人は否定した。真理を否定するユダヤ人は、その本性上嘘つきなのであって、逆に嘘つきはユダヤ人にほかならない。このイメージが経済行為に投影された時、いかさま商売をして善良なキリスト教徒を食いものにする、悪辣なユダヤ商人というイメージが成立した。<sup>93</sup>そしてかつてのキリスト教に代わって、ドイツ語という母国語が、ドイツ人にとって最も神聖にして犯すべからざるものとしての意義を帯びた時、つまりドイツ国民国家の要石の座を占めた時、キリスト教を冒瀆する者としてのユダヤ人のイメージが、ドイツ語を（つまりはドイツ国民国家を）冒瀆する者としてのイメージに置き換えられたのである。<sup>95</sup>

ある意味で、ドイツ語の冒瀆者ハイネの出現は、救世主の出現と同様に、すでに歴史の中に予見されていた。

ハイネは、「虚栄、強欲、冷笑、無節操、フランスかぶれ、にんにく臭、愛国心欠如、享楽欲、軽薄、虚無主義、根なし草、不道德、煽情主義、さらにその他の」非ドイツ的（氣質の一切合切）<sup>96</sup>を割り振られた。いや、なんらかの「ドイツ的」氣質がまず先に存在し、ハイネにはその反対物が割り振られたと考えるのは、正確ではない。そうではなく、ハイネ的なものを、つまりはユダヤ的なものを、一方に措定しながら、それと対置する形で、ドイツ的なものが他方に措定されたのである。そのような対置作業の中で最も重要なものが、ドイツ人にとって最も神聖にして犯すべからざる富であるドイツ語という母国語と、けがらわしく薄汚れた「ユダヤ語」の対置にあったことは、言うまでもない。ドイツ語に「改宗」したかのごとく見せかけて人を欺き、その実裏では罪深い「ユダヤ語」の世界に未だ隠れ棲み、その毒をドイツ語に注ぎ込もうとする者、それがハイネだった。

ハイネは、ドイツ語の冒瀆者としての役割を強いられた。しかし彼は、与えられた役割をただ忠実に果たしただけではなかった。むしろ彼は、その役割を逆手に取りながら、そのような役割を強いるパラダイムそのものの転覆を企てた。いかに「ユダヤ語」として隔離しようと努めても、それでも彼の書く言葉は、ドイツ人にも読めてしまうのである。騒音として耳をふさいでも、彼の声は聞こえずにはすまない。それが、言葉の持つ威力である。もちろん、固定したパラダイムの中に堅く閉じ籠り、ハイネの言葉を寄せつけまいとする、いやそれどころか、彼の言葉のひとつひとつを、その既定のパラダイムの中に隙にしようとする試みは、彼の存命中からずっと、現代に至る



までも、続けられてきた。その長年にわたる、労苦に満ちた努力の結果、今日のハイネ像が形作られている。ドイツ文学史の中に置き入れる余地のない、奇妙な例外者として。だが言葉は、たとえその言葉を書いた人間が遠い昔に死んだのだとしても、いつまでも生き続ける。言葉の起爆力は、いかにそれが遮蔽されたとしても、百年後、二百年後にも失なわれはしない。ハイネの記念碑の建立をめぐる騒動や、また彼の生地デュッセルドルフの大学名の改名（ハインリヒ・ハイネ大学への）をめぐる顛末は、彼が死せる歴史として、パラダイムの中に完全に取り込まれ尽してはおらず、いまだに挑発力を保持していることを証拠立てている。それは、彼の言葉の起爆力の強さの証である。

「ハイネは、やんごとなきドイツ語嬢のコールセットを緩めてしまい、その結果今日では、店員風情までもが、彼女の胸をまさぐることが可能になってしまった」というカール・クラウスの、ユダヤ的自己憎悪に彩られた評言は、ハイネの文体の平明な大衆性を言い当てたものとして、ハイネへの意図せざる称賛となっている。だがそればかりでなくこの言葉は、ドイツ語というものが、いやそもそも一般に「母国語」なるものが、コールセットによって、がんじがらめに縛られた状態にあり、ハイネの努力が、まさにそのコールセットを緩め、剥ぎ取ることによって、ドイツ語を解放することにあつたことを言い当てた点において、至言と言うしかない。ハイネがその生涯をかけて行なったことは、そのようにドイツ語を縛りつけることによって、「母国語」なるものを固定化し、身動きひとつ許さぬパラダイムから、愛するドイツ語を解き放つことだった。平明にして大衆的でありながら、惑乱的で破壊的な文体によって、彼はそのパラダイムを打ち壊そうとした。そしてその行為は、パラダイムの中心部に位置し、それによって支えられる者たちによってではなく、パラダイムの周縁部に追いやられ、むしろそこから排除されようとしている者たち、つまり「店員風情」によってこそ、支持され、また破壊のための起爆剤として利用されるべきものだった。

一八三五年十二月十日のドイツ連邦議会は、すでに十一月十四日にプロイセンで著作禁止を申しわたされていた

カール・グッコー、ハインリヒ・ラウベ、テオドル・ムント、ルードルフ・ヴィーンバルクの四人（いわゆる「若きドイツ」派）に加えて、ハインリヒ・ハイネの名をも、著作・出版を禁ずる作家のリストに挙げた。四人よりも年長で、過激な政治運動家というよりも、むしろ彼らの精神的庇護者にすぎないと目されていたハイネが、そのような措置の対象となった背景には、オーストリアの宰相メッテルニヒの強い要望があった。彼はその年の十月に、『サロン』第二巻に収められた『ドイツ宗教・哲学史考』を読み、ハイネに対して、改めて強い個人的関心を掻き立てられていた。メッテルニヒは、プロイセンの大臣ヴァイトゲンシュタインに対して、こう語ったと伝えられている。この著作は、「文体と叙述に関して、真の傑作であり、……我々の手を煩わせている連中の、目論見と期待の核心を含んでいる」と。二十年近い歳月ののち、ハイネはこの出来事を思い起こし、『流謫の神々』（一八五三年）の（のちに削除された）一節に、いささかの誇りをも交えながら、こう書いた。

「若きドイツ」派が市場に売りに出した、危険な理念のためではなく、むしろその理念に着せかけられた、大衆的な形式のために、悪しき一味を排斥する、かの有名な措置が発令されたのだった。特に言葉の達人であるその首謀者は、本来、思想家としてではなく、文体家として追及を受けたのである。いや、謙虚に告白するが、私の罪は思想ではなかった、それはむしろ書き方、文体だったのだ。<sup>(98)</sup>

## 注

- (48) HSA Bd. XX, S. 265.
- (49) HSA Bd. XX, S. 271.
- (50) HSA Bd. XX, S. 351.
- (51) Cf. DHA Bd. XIII, S. 294f.
- (52) DHA Bd. XV, S. 44.
- (53) DHA Bd. VI, S. 166.

- (54) DHA Bd. VI, S. 769.
- (55) DHA Bd. VII, S. 1068.
- (56) DHA Bd. VI, S. 769.
- (57) DHA Bd. VII, S. 129.
- (58) DHA Bd. VII, S. 136.
- (59) DHA Bd. VII, S. 140.
- (60) 邦語学雑誌 249° Wolfgang Hädeck: Heinrich Heine. Eine Biographie. München 1985, S. 224.
- (61) DHA Bd. VII, S. 142.
- (62) DHA Bd. XX, S. 373f.
- (63) DHA Bd. XIII, S. 65.
- (64) 拙論「ゲーテ・ヘンデルスゾーンの生涯」(法政大学教養部「紀要」第一〇九号、一九九九年所収)一二二ページ参照。
- (65) DHA Bd. XI, S. 114f.
- (66) Cf. Hauschild u. Werner: a. a. O., S. 290f.
- (67) Cf. A. a. O. S. 298.
- (68) HSA Bd. XXI, S. 221.
- (69) DHA Bd. XI, S. 19.
- (70) HSA Bd. XX, S. 82.
- (71) DHA Bd. XI, S. 92.
- (72) DHA Bd. XI, S. 120.
- (73) DHA Bd. XI, S. 121.
- (74) DHA Bd. XI, S. 120.
- (75) DHA Bd. XI, S. 129.
- (76) DHA Bd. XI, S. 130.
- (77) Cf. Hauschild u. Werner: a. a. O., S. 442.
- (78) HSA Bd. XXV, S. 275f.
- (79) DHA Bd. III, S. 177.
- (80) DHA Bd. III, S. 121.

- (13) Cf. Manfred Windfuhr: Ein Posten ist vakant. In: M. Reich-Ranicki (Hg.): Heinrich Heine. Ich hab im Traum geweinet. 44 Gedichte mit Interpretationen. Frankfurt a. M. und Leipzig 1997, S. 167.
- (14) DHA Bd. III, S. 114.
- (15) Dr. W. Stapel: Volk — Untersuchungen über Volk und Volkstum, Hamburg 1942, S. 267ff. 51 冊 Reich-Ranicki: Der Fall Heine, S. 80 以下。
- (16) Paul Peters: Die Wunde Heine. Zur Geschichte des Heine-Bildes in Deutschland, Bodenheim 1997, S. 10.
- (17) Cf. Franz Kafka: Briefe 1902-1924, Frankfurt a. M. 1975, S. 336.
- (18) シェン・エッセー／フーリマンズ・カタリ「千の千の千」。宇野他訳、河出書房新社、一九九四年、二〇ページ。
- (19) Cf. Siegmund A. Wolf: Vorwort zu »jiddisches Wörterbuch«, Hamburg 1993, S. 7.
- (20) Cf. A. a. O., S. 7f.
- (21) DHA Bd. XI, S. 24.
- (22) DHA Bd. XV, S. 75.
- (23) Cf. Peters: a. a. O., S. 105 u. S. 216 Anm. 229.
- (24) エッセー／シェン・エッセー「国民形態／歴史とイデオロギ」。若森章孝訳（エッセー／シェン・エッセー／イマニエール・ウォーラースタイン「人種・国民・階級」。若森他訳、大村書店、一九九七年所収）一七七ページ。
- (25) Cf. Peters: a. a. O., S. 66.
- (26) Cf. A. a. O.
- (27) Cf. A. a. O., S. 67.
- (28) Jost Hermand: Orte. Irgendwo. In: Reich-Ranicki (Hg.): 44 Gedichte mit Interpretationen, S. 113.
- (29) Karl Kraus: Werke. Hg. v. Heinrich Fischer. München 1954-70. Bd. VIII, S. 193.
- (30) DHA Bd. VIII, S. 554.
- (31) DHA Bd. IX, S. 294.